

# 南方（南洋諸島）

## テニアンの死闘

長野県 倉田 寿命雄

私は、男ばかりの兄弟八人の次男として生まれましたが、兄が病身にて早く亡くなり、私が下の第六人の面倒を見なければなりませんでした。當時は戦時体制下で、生めよ殖やせよと言う国策の下、どこの家でも八人あるいは十人兄弟も珍しくなかったのです。会地尋常小学校に入学し、続いて中学校に入学したのですが、父親に進められて飯田市にある加納商店の衣料品の外交販売に従事することになりました。

昭和十四（一九三九）年八月、徴兵検査を受け、

男子の本懐、甲種合格となり、入隊通知の来るまで加納商店の仕事に従事し、昭和十五年一月十日、松本歩兵第五十連隊に入隊することになりました。大勢の村の方々の見送りを受けて松本歩兵第五十連隊第九中隊に入隊、約六カ月間の初年兵の一期検閲を終了するまで、毎日演習で山野を駆け回っていました。

九月になって愛知県、岐阜県からの初年兵が入隊して来ましたので、これらの初年兵教育に従事することになりました。

この時の初年兵教育は、戦局が慌ただしくなったために、僅か三カ月で終了、我々の部隊は満州に行くこととなりました。松本連隊を出発、下関港より釜山に上陸、ここより列車にて満州の遼陽

に向って北上して現地に到着しました。

ここではまだ兵舎が完備してないので、それまで八路軍の兵舎に入ることとなりました。ここで松本歩兵第五十連隊は雷第三二一五部隊と称されて南方軍として第八方面軍第三十五軍第二十九師団の隷下となつて、満州からテナアンに転進することになりました。

第二十九師団は、我々歩兵第五十連隊のほかに、豊橋の歩兵第十八連隊、奈良の歩兵第三十八連隊及び直轄部隊から編成されていましたが、歩兵とこれらの部隊はグアム島に進出し、歩兵第一三五連隊の一部のみがテナアンに派遣されたのでした。そして昭和十九年二月、鞍山からテナアンに進じた本隊は、その輸送船が途中で米潜水艦の攻撃を受け大きな損害を受けたのでした。

テナアン島は起伏が少ない平坦な島で、軍事上の要衝と目され、四つの日本軍の飛行場がありました。当時日本の陸海軍約八千人、邦人約一万三千人、それに約二千七百人の朝鮮人がいました。

彼らは米軍の上陸前から軍に協力して飛行場建設などに従事していたのです。同島で砂糖など生産していた南洋興発の技術であつた中島文彦氏は、当時の様子を次のように記しています。

「もはや昼もなければ夜もなかった。男も女もなかった。老も若きもなかったのだ。また軍も官も民もなかったのである。一刻も争つて基地を完了し、軍需品並に糧秣の増産をはかり、敗勢を挽回して攻撃に転ずるよう、およそ働ける者は皆、あらん限りの力を振りしぼつて働いた」。

米軍は上陸制圧後、ここを基地としてB 29爆撃機が日本本土爆撃のため飛び立ちました。B 29が広島、長崎に原爆を投下したのです。

その前の昭和十九年二月二十三日、米軍のマリアナ空襲によつて、テナアン島の我が軍の飛行機九十三機が爆破され、我が軍は大損害を被つたのでした。同年五月になつて、ようやく戦力を回復したものの、ビアク島に米軍が上陸したため、ビアク島への攻撃に戦力を割かれていました。

六月十一日正午過ぎ、一哨戒機が「米機動部隊発見」を報じた後、消息を断ちました。そのおおよそ一時間後、米軍は、今度は上陸作戦のための空襲を行ってきました。その攻撃は熾烈でした。十五日にサイパンに上陸し、増援部隊の派遣はことごとく失敗に終わり、テニアン島は米軍の艦砲射撃と空襲にさらされ、さらにサイパン水道を挟んだ五キロ対岸のアギーガン岬からも砲撃を受けました。

米軍は執拗にテニアン島を砲撃し、同島の中東部のテニアン町（ソンソン）は灰燼に帰してしまいました。米軍の砲、爆撃によってテニアン島の航空機はことごとく、破壊されてしまったのです。角田司令長官にはもはや指揮する航空機もなく、潜水艦で脱出するにも海上は米軍によって封鎖されています。陸戦の指揮は歩兵第五十連隊の緒方敬志連隊長に委ねられ、緒方連隊長は米軍の上陸地点は西海岸のテニアン湾正面か東海岸のアシ―ガ湾と考え、テニアン島を三地区に分け、アシ

―ガ湾を含む北地区には歩兵第五十連隊第二大隊を、北西海岸を含む西地区には第一大隊の一個中隊を、ラソー山以南地区には第三大隊をそれぞれ配置し、連隊本部を日の出神社に置きました。

さらに連隊の第一大隊及び砲兵大隊をラソー山に、歩兵第一三五連隊第一大隊、歩兵第十八連隊戦車中隊をマルポ付近に配置し、島のどこに米軍が上陸しても対応できるよう布陣していました。

七月二十四日、テニアン湾に米第二海兵師団を乗せた上陸用舟艇が姿を現しました。日本軍は歩兵第十八連隊、戦車中隊など予備軍としていた部隊を増援に向わせ迎撃準備を整えました。

米軍は午前六時過ぎから二度にわたって海岸上陸を目指したのですが、その都度日本軍の攻撃に阻まれました。日本軍将兵や邦人たちには米軍が撃退されたように見えたのですが、この間第一飛行場近くの北西海岸には米軍の第四海兵師団が殺到していたのです。テニアン湾への上陸企図は米軍の陽動作戦だったのです。

米軍の激しい砲撃によって正午ごろまでに北西海岸の地形は一変し、陸軍の一個中隊と海軍の航空隊員で編成された、わずかの守備隊も、この奇襲によって壊滅しました。日没までには米軍師団のほとんどが上陸して幅八百メートル、縦千六百メートルの橋頭堡を築いてしまいました。

これに対して日本軍は夜襲を敢行しましたが、夜明けと共に約千二百人の戦死者を残して撃退されました。二十五日は、ランソー山に守備していた歩兵第五十連隊の戦闘指揮所が最前線となるなどの激戦でした。この日の夜、緒方連隊長は再び夜襲を計画しましたが、日本軍の損害は著しく、各部隊への通信も途絶したため、夜襲攻撃を断念せざるをえなかったのです。

二十六日、反撃態勢を整えるため連隊本部はマルポの洞窟に移動しました。しかし米軍の進攻は止まることなく、翌二十七日、連隊本部はさらに南のカロナス台地へ後退し、邦人たちも続々と南下しました。

二十九日、米軍は戦車を先頭にしてテニアン島唯一の水源地、マルポに侵入しました。三十日には第三飛行場も占領され、テニアン島の飛行場すべてが米軍の手に帰りました。米軍の砲爆撃によって廃虚となったテニアン町もこの日占領されました。

日本軍は翌三十一日にマルポ井戸及び第三飛行場などで反撃を試み、さらに同日夜から翌日八月一日にかけて夜襲をしかけたのですが、ことごとく撃退されました。

夜が明けると米軍は進撃を開始、とうとうカロナス大地の南端に達しました。米上陸部隊の指揮官シュミット少将は午後六時五十五分テニアン島占領を宣言したのでした。緒方連隊長以下、残された陸海軍将兵は八月三日、残存部隊、邦人の義勇隊など約千人で最後の突撃を実施し、緒方連隊長以下司令官、参謀長、警備司令など次々と戦死し、夜明けと共に日本軍の組織的抵抗は終わったのです。

この日まで日本軍の死者は五千人以上に達したといわれ、米軍の死傷者は約二千二百人で戦死者は「三百八十九人」だったと言います。生き残った日本軍の敗残兵たちは洞窟などに拠<sup>よ</sup>って、終戦後もゲリラ戦を続けていました。

一方邦人たちは南洋庁、南洋興発などで、それぞれ警防団を組織して、米軍の上陸する前から協力していました。邦人も米軍の進攻と共に南下し、ついにカロリナス大地に追い詰められました。テナアン島にもカロリナス大地の東に「スーサイドクリフ」（自殺の崖）と呼ばれる断崖があり、サイパンと同じく断崖から身を投じる者や、集団で自決する者もありました。

このようにして邦人の犠牲者はおよそ三千五百人にのぼったのでした。サイパン、グアム、テナアンを占領した米軍は、この三つの島に一大航空基地を建設してB 29爆撃機による、日本本土空襲を開始したのでした。

昭和二十年八月六日、テナアン島のハゴイ空軍

基地（旧日本軍の第一飛行場と第四飛行場）から飛び立った「エノラゲイ」は午前八時十五分に広島島の街に原子爆弾を投下したのです。更には長崎にも投下して一瞬にして何十万人もの生命を奪いました。この爆弾に、大きく戦意を喪失した日本は、ついに八月十五日無条件降伏となったのです。洞窟等で生き延びた者たちは、やがて米軍の捜索等で連行され、カロリス大地の収容所に集められて武装解除され捕虜生活に入りました。

南方の気候は暖かく、青々とした大海原、澄み切った大空には、敵機の攻撃はなく、先日まで、あの爆撃音、艦砲射撃の音もなく、まるで夢のような世界となったのです。そして毎日の仕事は砲撃で壊滅された跡片付け等の使役でした。

島には、果物はありませんでしたが穀物はほとんどできず、漁獲はあるとしても余り経済価値はない島でした。約四カ月ぐらい経て引揚船で懐かしい祖国へ帰ることが出来ました。

帰国後はまた出征前に勤めていた商店の外交販

売員をして今日に至っています。

今考えるに、あのような戦争の苦勞、そして六十有年の平和な尊い生活を、孫や末代まで受け継ぎ、語り継いでもらいたいと祈念するものです。

じつと眼を閉じると臉に浮かんで来るのは、あの時空爆や砲撃で、吹き飛ばされた戦友の姿です。

亡き英靈に合掌するばかりです。

## 松本、満州、トラック島戦記

長野県 中 塚 光 晴

私は大正十一（一九二二）年三月十日、長野県下伊那郡高森町の農家の後継ぎとして生を享けました。小学校高等科卒業後、青年学校での厳しい軍事教練の習得に努めました。このことが後の軍隊生活に大いに役立つこととなりました。

徴兵検査では連隊区司令官より甲種合格を申し渡され、昭和十八（一九四三）年一月十日、長野県松本の東部第五十部隊に入隊いたしました。そして土屋隊に所属して初年兵としての基礎教育を受けた次第です。

同年三月十五日前後ですが、夜間に松本駅より列車で出発、中央線を経由して下関に向かいました。そこで乗船、春三月とはいえ玄界灘は大荒れに荒れて、釜山港に上陸するまでは苦しい思いの連続でした。